台湾の現代仏教

——拠点寺院の門派化とその存在形態——

袁 輪 顕 量

1. はじめに

台湾の仏教には基本的に四方僧伽の意識が存在する。十方叢林の伝統が残っており、僧侶が比較的自由に寺院間を往来している。ところが1980年代以降、経済の発展に伴い、いくつかの寺院を拠点に巨大な門侶集団が出現し始めるようになった。これらの集団は伝統的な出家僧伽の意識を持ちながらも、宗教的エリート指導者のもとに巨大な集団化を遂げたのである。そして、それらの集団の中には門派の意識が生じ始めている。そのような現代台湾の仏教界の事情に興味を引かれ、筆者は1998年より訪問調査を行うようになった。本拙論はそれらの調査から得られた知見に基づくものである。

2. 台湾仏教の歴史概観

まず、台湾における宗教状況を台湾政府の内政部民政司編になる『全国寺廟名冊』⁽¹⁾から概観しておこう。現在、台湾内に存在する寺廟数は、道教7,416、仏教1,872、一貫道90、軒轅教6、理教4、天帝教1、天徳教5の合計9,394箇所であるという。これらの寺廟をその建設の主体別に分類すれば、①募金による建立②私財による建立③公的機関による建立の3つに区分される。また、その経営の組織形態で分類すれば、①管理委員会制②管理人制③財団法人制④社団法人制⑤執事会の5つに分類されるという。

現代、台湾に在住する台湾人僧侶の数は台湾全土で約20,000人といわれる。尼僧が圧倒的に多く、その比率は尼僧と男僧とで約五対一とされる。と

にかく女性の出家者が多いのが特徴である。これらの約20,000人の僧侶の内、1,000人前後が上座仏教またはチベット仏教を信奉する僧侶であるという⁽²⁾。中国仏教以外の信奉者の僧尼が約5パーセントほど存在することになる。

台湾に仏教が伝わったのは、歴史的に知られるのは明末の頃からである。台湾はもともと東海に浮かぶ宝の島として大陸の歴史書にしばしば名前を登場させるが、詳しい歴史が記述されるようになるのは意外に新しく、それは鄭成功が明朝の復興のために台湾を拠点としてから以降のことである。明王朝は残念ながら復興されることなく、台湾は清朝の支配を受けることになった。福建省に所属する一地域としての地位に甘んじることになったのであるが、この清朝の支配時代以降の歴史が比較的良く知られるのである。現在、この時期を日本が支配していた時代を基準に、日帝支配時代（日抛時代）以前と呼ぶことが多い。

この時期に、大陸から仏教が伝播したとの記録を持つ寺院が多く、それは観音信仰を媒介にする。台湾の西海岸沿いに古い寺院が点在し、たとえば、台北の龍山寺、嘉義の大仙寺、台南の竹溪寺などが挙げられる。おそらくは明朝末期の混乱期や清朝初期に福建系や広東地方に住していた客家系の漢民族が移住してきたが、彼らの素朴な信仰が伝播し、それに基づいて寺院が形成されていったのであろう（五十嵐真子 [2006]：17-18）。

さて、次の日帝支配時代（1895-1945）には齋教が組織的になり、仏教の隆盛を準備（日本曹洞宗と協力）した。もともと齋教は大陸の明代に生じた在家仏教運動であった。その創始者は羅夢鴻（1442-1527 別名羅祖師、羅孟洪、無為居士）であったと言われ、彼らは五戒十善を保ち、素食（肉食をしない、いわゆる菜食主義）、檳榔椰子を食べないなどの禁戒を守った。その信奉者たちは法衣を着せず剃髪もせずという様相であり、まさしく在家主義の仏教運動であったという。この齋教は清代に台湾に流入し、龍華教、金幢教、先天教の三系統が存在する（闕正宗 [2004]：204-225）。当初はバラバラの信仰集団であったが、それを組織化したのは日帝支配時代の曹洞宗で

あったという。齋教組織は、その後に出家者の仏教が興隆するときに先行する組織として重要な役割を果たした。また、この日帝支配時代に大きな流派が4つほど存在した（江燦騰 [1996] など）。それらは、

1. 月眉山派（基隆・月眉山靈泉寺・1903年開創 日本曹洞宗）
2. 凌雲寺派（淡水・観音靈雲山寺・1909年開創 日本臨済宗）
3. 法雲寺派（苗栗・大湖法雲寺・大陸鼓山湧山寺から覚力法師來台、1912年開創）
4. 大崗山派（高雄・大崗山超峰寺・1673年開創）

である。月眉山派、凌雲寺派は日本の曹洞宗と臨済宗がそれぞれ関与し、日本の在家主義的な仏教を台湾に紹介した。いわゆる僧侶の妻帯である。一方の法雲寺派、大崗山派は中国人の出家仏教者がその構成員となっていた派であった。中国人の仏教者たちは出家を守り教線を延ばそうとしたとされる。当時、日本の仏教者と台湾の仏教者とが協同する受戒会なども催されており、その記録（菩薩戒受戒の戒牒）が、台南の妙心寺に残っている（袁輪顕量・林淳 [2004]）。

大東亜戦争が終了した後には台湾は国民党の支配下に入った。しかし大陸においては共産党と国民党が争いを起こし、1946年6月より国共内戦が勃発した。この時期の1947年2月28日に台湾においていわゆる二・二八事件が起きた。この事件は何の罪もない一老女が国民党兵士に乱暴に扱われるという出来事を皮切りに大きな暴動に発展し、多数の内省人が虐殺される事態に至った。そしてこれを契機に台湾全土に戒嚴令が布告されることになった。この時に発令された戒嚴令が解除されるのは約40年後の1987年7月15日である。

さて、大陸における国共内戦は共産党軍の勝利に帰し、1949年10月1日、北京に中華人民共和国が成立した。国民党政府は台湾に拠点を移すことになり、最初は台南に拠点を置きやがて台北に移る。この国民党政府が台湾に移住するのに伴い大陸の仏教者も台湾に移住するようになった。この戒嚴令下に大陸から台湾に移住した僧侶として名高い人物は、高雄近郊に仏光山を築

いた星雲であり、また新竹や台北に拠点を持った印順である。印順は1952年に台湾に来島し、やがて新竹に福嚴仏学院という僧侶養成の専門学校を創設し、台北には慧日講堂という講説専門の道場を建立するに至った。また靈源も来台し、台北からほど近い基隆の港町に拠点を築いた。

さて、仏光山の星雲、及び福嚴仏学院、慧日講堂の印順などは、戒嚴令下にも活躍を見せ、とくに星雲はその集団を大きくさせていった。一方、印順はそのような組織化を見せるよりは台湾に存在する僧伽の構成員である出家僧侶の指導的な人物として活躍した。そして台湾の仏教が大きな発展を見せるのは台湾の経済が大きな発展を遂げる1980年以降であり、またそれに大きな拍車を掛けたのが、先に述べた如く戒嚴令の解除であった。その後、民国31（1942）年2月10日に制定された「人民団体法」が民国78（1989）年1月27日及び民国82（1990）年12月31日に修正され、宗教団体への国家による監視が緩やかになったことも台湾仏教の隆盛に対して大きな支援となった。そして1999年9月21日に勃発した台湾中部大地震が一つの試練となったが、この時に慈濟功德会は大きな働きをなし、台湾仏教界の評価を一段と高めたのである。

3. 現代の拠点寺院——その門派化——

さて、現代の台湾において注目される点は、新たに拠点となる寺院が成立し、その寺院を中心に仏教界に門派化が進行していることである。門派化と述べたのは日本の宗派とは異なって同じ仏教者としての意識は継承されており、排他的な関係にはなっていない点を重視するからである。その拠点となる寺院はその巨大化の年代順に挙げれば①仏光山、②法鼓山、③慈濟功德会、④中台禪寺、⑤靈巖山寺の5つである。簡単に概要を記せば次の通りである（江燦騰 [2000]、江燦騰 [2001] など参照。但し江燦騰 [2000] は靈巖山寺には触れていない。また後に江燦騰 [2003] では靈鷲山を挙げて5大拠点と数える）。

一、**仏光山** 高雄を中心に展開する一大仏教センターである。正確には高

雄縣であるが、高雄市という台湾第二の人口を抱える地に隣接する。その多くの人口を擁する大都市が隣接することも重要な要因である。信者数は100万人を超えると自称し、台湾内に300余りの支部（分院）が設立されている。この仏光山は、星雲（1927-）に指導されているが、その星雲は1949年に來台している。国共内戦が終焉に向かい共産党が優位になり、大陸においては宗教活動が行いにくくなり、やがて中華人民共和国が成立するのであるが、その年に台湾に来たのである。そして、17年後の1967年には仏光山の第一歩を高雄の地に築いている。仏光山の山内には寺院、博物館、ゲストハウス、図書館、仏学院、研修用施設などが揃っている。活動の傾向は「文化・教育・慈善・共修」との標語に端的に表されるように、大陸に19世紀末に始まった太虚の提唱した人生仏教（やがては人間仏教に発展する）の影響を受けている。特に文化的な活動に力を注いでいるのが特徴である。台北などの都市部においては、夕方から夜間に仕事帰りのサラリーマンの方々に支部に立ち寄ってもらい、生け花、茶道などを通じて仏法を説くという興味深い布教の形式も採用している。そのためか、伝統的に保持してきた非時食（午後食事をしない）の習慣を仏光山では改め、午後に食事を取ることを認めている。現在、海外すなわちロサンゼルス（1988年）に支部を設立したのを皮切りに、U.S.Aに9箇所、オーストラリアに5箇所、その他、ヨーロッパ、アジア各地に支部を持ち、日本にも東京仏光山寺、大阪仏光山寺（新たに本栖湖湖畔にも）など多くの支部を持っており、世界的規模で活動を展開している。

二. 法鼓山 この門派は台北に拠点築くが、現在の指導者は聖嚴（1930-）である。聖嚴は江蘇省に生まれ1943年に出家した。1949年還俗して国民党軍の兵士として従軍し台湾に来島した。やがて1960年、再び出家して台湾において東初（1907-1977）、に師事し、東初が1977年12月に遷化した後、その跡を継承して仏教文化館の経営、文化・学問の奨励を押し進めた。拠点となった地は台北郊外の北投にある農禅寺である。やがて農禅寺が手狭になり1989年には法鼓山（Dharma Drum Mountain）の創設を提唱し

て⁽³⁾、現在では一大拠点を基隆の郊外である金山郷に築いている。現在そこが法鼓山と呼ばれ、大学院の中華仏学研究所が存在し、また寺院の諸伽藍もここに存在する（法鼓禅寺と命名される。法鼓山大学の創設も希望し、2006年時点では法鼓僧伽大学が成立している）。指導者となった聖嚴は、日本の立正大学に留学し、台湾の僧侶で初めて文学博士の学位を取得したことで有名となった。また聖嚴の日本への留学中に、印順にもその著作に対して大正大学より学位が授与された（国史館口述歴史叢書（25）：211-220、法鼓山[2005]）。この法鼓山は、その指導者が現代の仏教学を学んだ故もあろうが、学問及び瞑想にその特徴が見出される。後述する禅七などを頻繁に行い、瞑想に詳しい門派である。実際、台湾内でしっかりとした学問的素養に裏打ちされた門派は法鼓山のみであるとの世評を勝ち取っている。

その活動は1980年代後半より活発となり、台北を中心に現在40万人以上の信者を擁している。また出家に対して厳しい制限を課しており、宗教的素養を持ち合わせた人物しか出家させない方策を実践しており、その僧侶の育成には十分の注意を払っている（袁輪顕量 [2000]）。

三. 慈濟功德会 現在、台湾でもっとも知名度の高い集団となったのがこの慈濟功德会である。出家の集団としては小さいが、社会福祉の面で活躍する在家の「委員」と呼ばれる人が2万人、そしてそれを支える会員が全世界で400万人以上居るとされている。その指導者は尼僧の證嚴（1937-）である。證嚴は1992年台湾でノーベル平和賞の候補に推されたという経緯を持つ（趙賢明 [1994]）。

人口もそれほど多くはない台湾中東部の都市である花蓮にその拠点が存在する。台湾の開発が大陸に面した西部の平野を中心に進んだのに対し、東部地域は経済的にも福祉的にも遅れたと見え、行政の仕事を代替するような形で證嚴は10数名の同志と共に1966年より社会福祉・救済活動を開始し、1981年頃より大発展した。これも台湾が経済的に発展し始める時期とほぼ一致し、台湾の経済の発展と揆を一にして大発展を遂げたことが知られる。

その活動の中心は社会福祉活動にある。諸問題の最終的な原因を貧困と位

置づけ、貧困に正面切って取り組んだ慈善救済活動がその中心に位置するのである。山間部の少数民族に対する援助活動や、低所得者層に対する支援などを仏法の菩薩道の実践と位置づけ、急速に支持者層を増やし、世界に誇る慈善救済団体に成長した。現在では災害時の救援活動にその活動範囲を広め、赤十字とともに世界の災害時にヴィザ取得なしに入国できるまでの信用を獲得している。その活動の根本に證嚴の仏法の説教と、委員の方によって構成されるのであるが、実際に援助活動の現場で直面した事例を持ち寄り検討する検討会が存在する。この検討会は高度専門職者としての意識を生み出す機能を十二分に発揮しており、その活動を支える重要な役割を担っている。

なお、当初は国内の貧困者救済から始まり、それは或る意味で国家の福祉政策の肩代わりをするものであったと想像されるが、台湾内部の状況の改善により、海外における救済・福祉援助活動へと主力を転換し、また災害時の援助に重点が移ってきている。たとえば、1999年の台湾中部大地震、2004年のインドネシア沖大地震の際の災害援助活動は、多くの注目を浴びることになった。また證嚴の周りに集まってきた尼僧によって形成された出家者の集団は、花蓮郊外の静思精舎に住し、規模は小さいが證嚴の意志を継承して、自給自足を原則とした生真面目な生活を続けている。

四. 中台禪寺 この寺院は台湾中部の埔里鎮に存在し、発展の時期は比較的最近であり、1990年代の後半以降である。一躍有名になったのは1996年9月1日に100人を集団出家させた時からである。この集団出家事件は台湾社会に衝撃を与え、当時の新聞に大きく報道され、物議を醸した。夏の合宿に参加していた学生を中心に出家者が輩出し、なかば強制的ではなかったかと疑われ、事件性をもって報道されたのであるが、実際にはそれ以降、大きな社会問題には発展しなかった。かわりに伝統的な仏教の復興と意識され、知名度が上がるという結果を招いた。この門派は惟覺禪師(1928-)に指導されるのであるが、禪師という呼称が示すように瞑想を中心に置いている。入息出息観に始まり、中道実相観を目指すのであるが(袁輪顕量 [1999] 及

び同 [2000]), その名称には禅の素養と天台の素養が感じられる。瞑想を中心とした合宿である禅七を1991年に連続して七期行ったことから有名になり、また1996年の集団出家を引き起こすまでに発展したのである。

台中より車で約2時間、埔里鎮に存在する現在の中台禅寺は、巨大な鉄骨、鉄筋コンクリート製の大伽藍で、表面は大理石や御影石などの石で装飾された立派なものである。しかし、1999年9月21日の台湾中部大地震の際に、庶民が被災して苦しむ中、建設を強行したとの批判を浴び、若干、衆庶の厳しい目に晒されているところがある。なお、この門派は大陸の虚雲の法脈を継承し、どちらかといえば伝統派である。台湾各地に精舎と呼ぶ支部を数多く持つ。

五. 靈巖山寺 同じく埔里鎮の山中に存在する寺院がこの靈巖山寺である。この寺院の創設者になる人物は妙蓮(1922-)である。妙蓮は1981年に来台している。台湾の人々の純朴なることに感心し、仏法を広めるには適地であると考え、永住を決意し、大陸は蘇州の靈巖山寺に伝わった念仏修行を台湾に紹介した。1984年に埔里鎮に拠点を決め台湾版の靈巖山寺を創設した。念仏による瞑想いわゆる仏七を広めることになったのである。この修行方法については後に記したい。今ではU.S.A等にも支部を持つ巨大な拠点寺院の一つとなっている。

その他、注目される寺院は幾つも存在するが、中でも特記するに値すると思われるものを若干、取り上げて簡潔に紹介しておきたい。

六. 西蓮淨苑 この寺院は寺とは名乗っていないが、台北郊外の三峡鎮に存在する成長途上の大きな寺院である。他の巨大寺院と同じように支部寺院に相当するものを幾つか持っている。指導者は、智諭(1923-2000)であったが、2000年に遷化され、後は惠敏が継承している。惠敏は日本の東京大学に留学し、文学博士の学位を取得した学僧でもある。現在、台北の北投郊外に在る台湾藝術学院の教授も兼任し、また法鼓山の中華仏学研究所でも副所長の要職を占める。この西蓮淨苑では仏七なるものが中心的な修行として行われ、台湾内部でも念仏の実践道場としての名声を得つつある。実際、念

仏と坐禅とを組み合わせた独特の仏七を実践しており、台湾の旧正月を挟んで年に4回ほど開催される仏七には毎回150名前後の参加者がある（袁輪顕量 [2005]）。

七. 正覚精舎 この寺院は埔里鎮に存在する規模の小さいものであるが、戒律の遵守と瞑想の実践のみを行い、それでいて運営が成り立っている極めて珍しい寺院である。いわゆる出家修行の理想の道場と言える。僧侶の中には、あたかも糞掃衣と紛うばかりの継ぎ接ぎだらけの僧服に身を纏った僧侶が存在するが、糞掃衣ではなく、単に今風の「勿体ない」精神の現れのみという。戒律の遵守を行い、日々の修行を大事にする寺院であり、しかも在家向けの一切の活動は行っていない。この点が珍しく、寺院の経済を支えるものは信者の布施のみである。出家者の修行専門の道場として注目される。

八. 南普陀寺 台中に存在するこの寺院は仏学院を持ち、その仏学院で有名となった。四分律に基づいた生活を実践しており、戒律厳守の寺院として評価が高い。波羅夷法の違反の時には僧伽からの追放が実際に行われており、戒律を厳守しながら律学の修学に務めている。ここに学ぶ僧侶も100人を超えており、周辺地域に存在する寺院から、布薩の日には僧尼ともども集まってきたりと、拠点としての役割を果たしつつある。後に述べる仏学院の代表である福嚴仏学院とも友好的な関係にあり、教員の兼任が行われている。ここは出家者の教育で注目すべき寺院となっている。

4. 子弟の教育

南普陀寺は仏学院として著名であると先に述べたが、僧侶の教育機関として設置されているものが仏学院と仏学研究所である。仏学院は日本の大学で言えば学部に対応し、仏学研究所は大学院に対応する。しかし日本の教育制度と厳密な意味では対応せず、実質的には専門学校に近い。仏学院は仏教を専門に修学する機関であり、普通教育とは一線を画している。正式の教育機関ではないので一般の大学と同等の卒業資格は残念ながら得られない。最近ではこのような位置づけを改善すべく、仏学研究所が正式に大学院として認

められた。大学院を正式に位置づけ研究者を輩出し、正規の大学の教員として認めようとの方針であるという。つまり仏学院を4年生の大学として将来的には認める方針であるという（袁輪顕量 [2003]）。

仏学院の代表的なものとして、福嚴仏学院（新竹）、圓光仏学院（中壢）、南普陀仏学院（台中）、仏光山仏学院（高雄）、中華仏教学院（台中）、香光尼衆仏学院（嘉義）などが挙げられ、全台湾で36箇所（1997年版『仏教通説録』）が知られる。これらの中では、印順が創設した福嚴仏学院が比丘の養成機関として（闕正宗 [2004]：302-333）、月眉山円光寺が創設した円光仏学院が尼僧の養成機関として有名である。拠点寺院が設立した学院は別として、それ以外の仏学院は四方僧伽の僧侶にオープンであり、台湾全土の僧侶子弟が入学することができる。円光仏学院は高等部も持つが、普通高校と同等ではなく、大学に進学するには別途単位が必要となっている。東南アジア（マレーシア、インドネシアなど）の華人社会やインド、ネパール、ブータンなどからも留学生が集まり、アジアの仏教修学の拠点になりつつある。また現教務部長である釈性一（尼僧）は日本の東北大学への留学経験があり、海外で学んだ僧侶が指導的立場に立っている。

また仏学研究所としては圓光仏学研究所（中壢）、中華仏学研究所（台北縣金山郷）、浄覚仏教研究所（台北市）、慈明仏学研究所（台中）、仏光山中国仏教研究院（高雄）などが存在する。なかでも、円光仏学研究所、中華仏学研究所が規模も大きく、またその教員も充実している点で注目すべき代表的な研究所である。中華仏学研究所には大学も併設されようとしている。実際2001年には4年生の法鼓山僧伽大学が設立されている。それらは金山郷の広大な敷地の中に建物が点在し、質、量ともに他を圧倒している。

そして、僧侶の方が発願して大学を設立したものすなわち仏教系大学（教育部認可）も4箇所が知られる。中国仏教協会が発願した玄奘大学（玄奘人文社会学院、新竹に存在）、中国文化大学の永久教授であった暁雲が創建した華梵大学（台北に存在）、2002年から一般の学生も正式に募集し始めた仏光大学（仏光人文社会学院、宜蘭縣に存在）、南華大学（1996年より嘉義に

存在)である。これらは台湾政府の教育部に設立の認可された数少ない仏教系の大学として注目される。

仏学院、仏学研究所においては仏教学が専門的に学ばれており、仏学院では主に中国に成立した漢訳仏教圏の仏教が学ばれている。仏学研究所においてはサンスクリット、チベット語を含んだ高度な仏教学が学ばれている。正式の大学では、仏教は仏教学単独で学ばれているのではなく、哲学や宗教学の一部として学ばれている。その実態は U.S.A の宗教学科等の中での有り様に近い。何れにしろ仏教の研鑽に関しては、いち早く近代的教育制度を取り入れた日本の例が念頭に置かれている。日本の仏教系大学のように、大学の中に仏教学部が設立されることが望まれており、現在、陳水扁政権下、その方向で改革が進められている。

5. 修行の形態と社会的布教の特徴

さて、台湾仏教の特徴となるものの一つは修行道である。その修行道は大きく分けて二つ存在する。一つが仏七、もう一つが禅七である。この二つについて触れたい。

(1) 仏七

まず仏七は、その特徴を端的に述べれば、称名念仏と坐禅瞑想とを組み合わせた修行方法である。中国の宋代の頃から主張される「禅浄双修」「禅浄一致」の具体的な形態と考えられる。その内実は、一時間（一支香分＝平均的なお線香一本分の時間）または二時間（二支香分）を一つのまとまりとし、「南無阿弥陀仏」→「阿弥陀仏」→「阿弥陀」→「阿弥」と、ゆっくりと唱えはじめてから次第にその唱和のテンポを早くする。そして、ピークを迎えてから逆にゆっくりと唱える方向へと変化し、途中から完全に黙して観想の瞑想に入るのである。この称名念仏と観想念仏とを組み合わせたものを一単位とし、これを日に何度も、実際には二度または三度、繰り返すのである。この仏七の最中は食事や休憩時間も余計な発語は控えるよう注意が促さ

れており、集中が途切れないようにとの配慮が働いている。

この仏七は在家者と出家者が共同して行っている。なお仏光山や靈巖山寺に行われる仏七では称名と観想とを組み合わせた一つの単位はわずか一時間弱であった。この点から考えれば、仏七はどちらかといえば在家者を意識した修行形態とすることができる。

しかし、台北郊外の三峡鎮にある西蓮淨苑に行われる仏七では、一つの単位の時間が二支香分すなわち二時間近くであり、こちらはかなり専門的な瞑想を意識した形態になっている。但し、こちらはその称名はゆっくりから早くへと唱えるので、心の昂揚が生じてしまうことは間違いない。

その西蓮淨苑に行われる仏七の際に配布される仏七関連の資料の中に『佛七手冊』なるものがあったが、その中に次のような一節が見出される。

円満日礼祖

頂礼西天東土歴代祖師 頂礼天下宏揚佛法諸大善知識 頂礼初祖廬山東林遠公大師 頂礼二祖長安光明導公大師 頂礼三祖南嶽槃舟遠公大師 頂礼四祖五台竹林照公大師頂礼五祖新定烏龍康公大師 頂礼六祖杭州永明壽公大師 頂礼七祖杭州昭慶常公大師頂礼八祖杭州雲棲宏公大師 頂礼九祖北天目靈峰旭公大師 頂礼十祖虞山普仁策公大師 頂礼十一祖杭州梵天賢公大師 頂礼十二祖紅螺資福醒公大師 頂礼十三祖蘇州靈巖量公大師 頂礼古今蓮社宗師 頂礼主七和尚（点線、筆者付す）

これは「円満日礼祖」と記された部分であり、円満日すなわち七日目の成満日に礼拝される諸祖師である。ここには廬山の慧遠、長安の善導、宋代の永明延寿、明代の雲棲珠宏、清代の聖量印光らが列記されている。仏七の起源として直近に大陸蘇州の靈巖山寺に住した印光（1861-1940）が挙げられ⁽⁴⁾、大陸の仏教の影響であることが知られる点で興味深い。なお埔里の靈巖山寺に行われる仏七の基本は45分（30分称名念仏、15分観想念仏）を単位としており、一日に6回繰り返すものであった。

(2) 禅七

次に注目されるものは禅七である。これは終日、瞑想を中心に行う行である。これも在家者とともに行うが、時には出家者のみを対象として行う場合も存在する。禅七など瞑想を介して台湾社会の中にその地歩を築いて巨大化した寺院は、中台禅寺と法鼓山の両寺である。どちらも、瞑想に秀でるとの評価を台湾社会の中で勝ち得ている。中台禅寺の禅七は、基本は入息出息観であり、時には話頭も使用される。この話頭は入息出息観で心の働きが落ち着いてきたところで把握されるようになる、心の働きの最初の揺らぎを覚知することとされている。このような話頭の理解は19世紀から20世紀にかけて最大の禅者と言われた虚雲（1840-1960）にも見られ（岑學呂 [1996] : 141-153）、清末の仏教界から確認されるものである。とくに中台禅寺を興した惟覚禅師は虚雲の流れを汲むことを標榜しているため、その影響と考えると良い。また最終的な瞑想の境地は中道実相観と表現され、天台的な理解も見られる。

この禅七と実際には全く同一の内容から構成されるが、その期間を短くした禅一（一日だけの実習）、禅二（二日間の実習）、禅三（三日間の実習）も頻繁に行われており、瞑想を通じて心を観察する修行が見られる。これらの日程を短くした禅の実習は、都市部に働くビジネスマンを対象としたもので、参加しやすいように日程上の工夫が凝らされたものである。そのほかにも公案を用いて心の働きを一つのものに集中させる瞑想や、また心に生じる働きを覚知しつつ、静かに坐る黙唱禅も行われている。また、東南アジアとくにミャンマーから紹介された上座仏教の samatha（止）と vipassanā（観）による瞑想修行も実践されている。嘉義市郊外の法雨道場は、現代ミャンマーの高僧とされる Pa Auk 比丘の指導する瞑想を実習する場であり、また同じく嘉義の郊外であるが、香光尼僧団でもミャンマーの Mahasi Sayadaw のヴィパサナー瞑想が紹介されており、積極的に東南アジア各地域の仏教の修行法が紹介実習されているところも存在する（袁輪顕量・林淳 [2004]）。

(3) 布教の形態

布教の媒体としてテレビが存在することも大きな特徴として上げられる。所謂テレビ布教である。台湾には仏教系のチャンネルが4つほど存在する。大愛（慈濟功德会）、仏光（仏光山）、法界衛星、佛衛電視慈悲台の4つであるが、朝勤に始まり僧尼の説法や夕方の法要など、ほぼ一日中放送されている。中でも大愛は独自のテレビ局を持ち、本格的な放送を行っている。日本では宗教団体の運営するテレビ局は存在していないので、これは大きな相違である。またインターネットのホームページを介しての布教も充実している。

さらに仏学社団及び仏教青年会が各地に存在することも大きな特徴となる。仏学社団はかつては日本の大学のどこにでも存在した仏教青年会に相当するもので、大学生がその構成メンバーの中心である。仏教青年会は独自の組織を持つ。台北に拠点をもち活動している青年僧尼たちの団体である。これらの機関も仏教体験の合宿を行ったり、子供向けのプログラムを作ったりと独自の活動を行っている。

また出版物が多様に存在することも特徴の一つである。特に拠点となる寺院においては様々な本が出版され、無料で配布されている。たとえば、法鼓山では独自の出版社である法鼓文化出版会社が設立され『法鼓文化叢書』などが、中台禅寺では『中台山月刊』『中台電子報』を始めとして中台山仏教基金会による多数の出版が、仏光山では『普門』『仏光文化』、電子新聞の『人間福報』など寺院独自の出版物が多様に存在している。そのどれもが無料で配布されており、関心のある方には絶好の読み物となっている。

6. 台湾仏教の存在の形態

さて、最後になったが、台湾仏教の存在の形態について述べてみたい。台湾における仏教の存在の有り様を見てみると、そこには独自の形態があるように思われるのである。その一つとして、比丘・比丘尼のための房が同一寺院内に存在することがまず挙げられる。一例を挙げれば、埔里の中台禅寺が

挙げられる。中台禪寺は埔里の郊外に巨大な伽藍を築いたが、その伽藍の中に、左右で振り分けられてはいるが、男僧と尼僧のための僧房が存在するのである。このような形態は台湾独特のものであり、上座仏教圏では見られない。上座仏教圏では比丘の寺院と比丘尼（実際には沙弥尼であり正式の尼は存在しないことになっている）の寺院は、在る程度の距離をもって離れて存在している。このような比丘、比丘尼の居住区画が一つの寺院の中に共存する例は、日本の中世末の寺院の中には存在したことが知られているが⁽⁵⁾、その他の地域では知られていない。同一寺院内の男女の共住は時には波羅夷に係わる事件を惹起する可能性があり、現在では是正の方向を打ち出している処もある。例えば台北郊外の西蓮淨苑では末寺に相当する西蓮光明寺を男僧の住する寺院に、山峽鎮の西蓮淨苑を尼僧の住する寺院に特化させる方向を打ち出している。ちなみに台湾の研究者の中には、この男女共住の形式は日本占領時代の置きみやげであると指摘する者もある（江燦騰 [2000] : 116-120）。

また、台湾の僧侶は圧倒的に尼僧が多い。男女の比率は現在、五対一と言われる。しかも、尼僧の中には大学卒業の学士号を持ったハイレベルの方が多く輩出されている。とくに近年この傾向が強い。女性の自己実現の場として出家が存在していると言っても過言ではない。その理由は明確には示せないが、儒教道徳の影響である可能性も指摘できる。男性にとっては祖先の祭祀などが義務として存在するので、その執行のために家に留まらざるを得ず出家は容易ではないが、女性にはその縛りが無く出家がしやすいという雰囲気があるようである。また、社会的な女性の地位と関連する点もあるとみえ、台湾社会に高等教育が普及したこと、女性の未婚、晩婚、単身生活が普通に考えられるようになったこと、女性の自己実現の場が出家の世界に求められ、また寺院の運営が高度化し、一種の就職の場と化したことなどが原因となっているようである（江燦騰 [2003] : 243-246）。

また、台湾仏教全体としては単一の僧伽が存在しており、いわゆる四方僧伽の意識が生きている。台湾全土に存在する中小の寺院は4, 5名からなる

現前の僧伽が基準となって成立している。このような場合には現前の僧伽に所属する少人数の比丘または比丘尼たちが行動する単位となる傾向が強い。実際、西蓮淨苑の尼僧に対するインタビューの中で、台湾の仏教界では日本の宗派のような組織的な活動がし難いとの感想が寄せられたが（袁輪顕量 [2005]）、これはそのことを如実に物語っていよう。近代化した組織を持つ日本の宗派に、多少の利点も存在するということであろう。

さて、台湾の仏教界では門派化が進行中であることも大きな特徴の一つである。特に高雄の仏光山、台北の法鼓山、埔里の中台禪寺、靈巖山寺、花蓮の慈濟功德会などが注目される存在であるが、とくに前四者は出家集団の中で門派化を進めている。拠点寺院を中心にしてその配下に支部の寺院が存在しており、その支部の寺院に住する僧尼たちは、拠点寺院で学んだ僧侶達であることが多い。拠点寺院は日本の本山に相当し、各地の支部（精舎とも分院とも呼ばれる）は末寺に相当する。実際にはそのような用語は存在しないが、実質的にはほぼ同様の働きをしている。このように台湾の仏教界において門派化が進行中であり、それが新興宗教となることなく、伝統的な仏教界の枠内に留まっていることは注意される点であり、それは東南アジアの仏教界にも共通して見て取れる現象のように思われる⁽⁶⁾。

7. 指導理論とその提唱者

さて、縷々述べてきたが、台湾の仏教にとって現在のような隆盛を築いた直接の切っ掛けは、国共内戦を機に台湾に渡った大陸の僧侶達であったと言って良い。中でも台湾仏教全般に対して大きな影響を与えた人物は印順である。彼の提唱した「人間仏教」という理念は、仏光山の星雲、法鼓山の聖嚴、慈濟功德会の證嚴などに大きな影響を与えた。また拠点寺院の指導者だけではなく、中小の寺院の僧尼にも少なからず影響を与えている。

印順の主張する「人間仏教」は、19世紀末から20世紀にかけて大陸に活躍した太虚大師の主張を継承発展させたものと考えられる。太虚はそれまでの中国の仏教が、靈魂など死後に関することを中心とする仏教であったこと

に反省を加え、生きている人間に係わるべきものであることを主張した。これが「人生仏教」というスローガンに結実し、20世紀初頭の大陸の仏教界を指導することになった。印順も基本的にはこの時の改革運動を継承する。そして、印順は、『増一阿含経』に登場する「諸仏皆出人間 終不在天上成仏也（仏たちは皆、人々の間に出現し、けっして天上で仏となることはなかった）」という記述に導かれ、人々の間ですなわち人間（ニンカン）に活動する仏教であるべきことを提唱したのである。そもそも日本語の「人間」には人の住むところ世間という意味と、社会的な存在としての人という二つの意味が認められるが、印順の主張は、前の意味、すなわち現実のこの社会に積極的に関与する仏教との意味合いが強い⁽⁷⁾。

印順の著作になる『人間仏教論集』に納められた「人間仏教要略」によれば、その原則には「法与律合一（法と律との合一）」「縁起与空統一（縁起と空との統一）」「自利与利他合一（自利と利他との合一）」があると謳われている。法と律との合一とは仏法の教えと戒律とは表裏一体のものであり、法によって発心修行し智慧を成就し、戒律によって不道德なことを止め僧伽の庶務を処理すること、縁起と空との合一は初期仏教の精髓が縁起であり大乘仏教の精髓が空であるということ、自利と利他との合一は、菩薩行を實踐する人は自利と利他とが相応するということ、と主張するのである（印順[2001]: 174-182）。

次に注目されることとして菩薩戒の自由化が挙げられる。菩薩戒は東アジア仏教圏においては、古来、『梵網経』に基づいた梵網戒がほぼ全面的に用いられてきた。これに対し、1993年に菩薩戒の自由化が宣言された。自由化というのは如何なる経典に基づこうとも否定しないということで、その背景には近代仏教学が明らかにした『梵網経』は疑経典であるという見解の影響が有るものと考えられる。その結果、在家菩薩のためには、『優婆塞戒経』に説かれる6重28軽戒を用いても、また『梵網経』に説かれる10重48軽戒を用いても良く、また出家菩薩のためには10重48軽戒でも、『瑜伽師地論』の4重43軽戒でも良いことになった。このように学問的な研鑽が僧侶の実

際に反映されることは注目して良い。そこには仏教学の将来を考える上で重要な視点があるように思われる。

また、仏七の調査から知られたことであるが、僧侶の創意、工夫が認められている点も注目される事象である。仏七は基本は称名念仏と観想念仏であるが、時間はそれぞれの寺院任せであり、現場における工夫の余地が大であって、それぞれが是認されている。おそらくそれは瞑想の原則が保持されていれば多少の異同は問題にならないと考えられているのであろう。たとえば、日本の仏教と比較した場合、日本の仏教は原理原則に忠実であることが宗教信仰であり、特に（思想的な）異質性を極端に排除する傾向を持ちがちであるが、台湾の仏教にはそれが感じられない。ここにも一つの特徴があるように思われる。

8. さいごに

台湾において現在、仏教が盛んな理由を幾つか挙げてみよう。台湾において仏教信仰に入る時に、市井に存在するタンキー（童乱）がその信仰を勧める場合が見られた。これは、寺院周辺に存在する民間信仰的な部分と、中心に存在する高度な仏教との共存関係とも見て取れる。機構の整った僧伽への信仰を市井の民間宗教者が誘導しているのである。このように、民間信仰との共存が理由の一つに挙げられるであろう。

次に、台湾が経済的に発展したのと揆を一にして仏教も伸長を遂げたところが見られる。戦後の戒厳令期は混乱を静め社会を安定化させる時期であったが、この時期には文化的な側面で仏教信仰が大きな役割を果たしたように思われる。特に仏光山はそのように思われる。生活の安定化の中で文化に関心が集まり、その主翼を担ったのが仏教だったのである。

その後、経済が伸長し始める80年代が続くのであるが、この時以降は瞑想を中心とする法鼓山や中台禪寺が勢力を伸張させた。このことから見れば経済的な発展と表裏一体となった人間の精神的な不安に対する安らぎ、解決を求めて仏教に人々が集まったと見ることができる。また在家者側からの要

求に答えられるだけの人材が出家者側に輩出されたことも要因の一つとして忘れてはなるまい。特に仏光山、法鼓山、中台禪寺、慈濟功德会には、宗教的資質に恵まれたカリスマ的な指導者が存在する。出家の僧伽が機能しており、かつその上に優秀な人材が偶然にも現れたが故に現在の隆盛が存在するのであろう。というのは大陸においても出家の僧伽は機能しており、出家の僧伽の存在だけが繁栄の理由であるとは言い難いからである。やはり資質に恵まれた人物が登場して、その上に活躍のできる場が存在したことが大きいのではあるまいか。

また、台湾には、大陸に存在した清末の伝統派である虚雲の影響を受けた僧侶と、改革派とされた太虚の影響を受けた僧侶の双方が存在し、そのどちらも積極的に社会に対して働きかけ活躍しているところも興味深いところである。

注

- (1) 全国各直轄市縣市寺廟教別統計表『全国寺廟名冊』（内政部民政司編，民国91（2002）年）。なお教理編として『宗教簡介』（内政部編，民国90（2001）年）が存在する。
- (2) 2006.2.7 南普陀寺教務長とのインタビューから。詳細は、『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』21，2006年に掲載。
- (3) 聖巖法師の事績は法鼓山 [2005] を参照。また簡単な法鼓山の紹介として聖巖法師講述『法鼓山的方向』（法鼓山文教基金会，民国86（1997）年）がある。
- (4) 聖量印光は清末を代表する4人の僧侶（太虚，印光，弘一，諦閑）の1人に数えられ，浄土教を広めた人物として浄土宗第十三祖とされる。末木文美士・曹章祺 [1996] : 368及び岑學呂 [1996] : 194-196を参照。また江燦騰 [1998] : 417-429。
- (5) 辻善之助『日本仏教史』中世編之五，331参照。宣教師のビレラがインドのイルマンに送った書簡の一節。「時宗と称する一派は，僧院の人男女悉く雑居し少しも別なく，夜は皆共に時の祈祷を唱し，坊主は院の一部に女の坊主は他の一部に帰る」と有り，男女共住が知られる。
- (6) 例えばミャンマーでも，瞑想の復興が19世紀末頃になされ，Mahasi, Swanlun, Mogkok, Ubhakin など幾つかの流派が成立したが，新興宗教的なものにはなっていない。金宰晟 [1997] 参照。

- (7) 陳繼東「人間浄土——現代台湾仏教の一主張——」（武蔵野大学，2006年6月，研究会，発表資料）なお，人間仏教に関して台湾内でも研究が多い。たとえば，邱敏捷 [2000]，聖巖 [2000]，江燦騰 [2001a] 同 [2001b]，伝道 [2001] など。

参考文献

(日本語文献)

- 五十嵐真子 [2006] 『現代台湾宗教の諸相』（人文書院，2006）京都
 金子 昭 [2005] 『驚異の仏教ボランティア——台湾の社会参画仏教「慈濟会」——』（白馬社，2005）京都
 岑學呂 [1996] 岑學呂居士編・慧光・大島龍玄訳『虚雲和尚伝——百二十歳の生涯——』（葦書房，1996）
 趙賢明 [1994] 『台湾に三巨人あり』（講談社，1994）東京
 袁輪顕量 [1999] 「台湾現代仏教事情——中台禪寺を中心に——」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』14，1999）
 —— [2000] 「台湾の仏教」（『東洋学術研究』39-1，2000）
 —— [2003] 「現代台湾仏教における師弟の育成について——仏学院・仏学研究所を中心に——」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』18，2003）
 —— [2005] 「西蓮浄苑における佛七」（『禅研究所紀要』32，愛知学院大学，2005）
 袁輪顕量・林淳 [2004] 「台湾の現代仏教と道教信仰」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』19，2004）
 金宰晟 [1997] 「南方上座仏教における修行の理論と実践——タイとミャンマーの現地調査に基づいて——」（『パーリ学仏教学研究』10，1997）

(外国語文献)

- 印 順 [2001] 『人間仏教論集』（正聞出版社，2001）新竹
 法鼓山 [2005] 『聖巖博士自叙伝——勉学と思想——』（法鼓文化，2005）台北
 闞正宗 [2004] 『台湾仏事的信仰與文化』（博揚文化事業有限公司，2004）台北
 潘 焯 [2002] 『看見仏陀在人間——印順導師伝——』（天下文化，2002）台北
 江燦騰 [1996] 『台湾仏教百年史之研究1895-1995』（南天書局，1996）台北
 —— [1998] 『中国近代仏教思想的諍辯與發展』（南天書局，1998年）台北
 —— [2000] 『台湾当代仏教』（南天書局，2000）台北
 —— [2001a] 『當代台湾人間仏教思想家』（仏教文化叢書7，新文豊，2001）台北
 —— [2001b] 『台湾仏教文化發展史』（南天書局，2001）台北
 —— [2003] 『台湾近代仏教的変革與反思』（東大図書，2003）台北

- 江燦騰主編 [2005] 『台湾宗教信仰』 (東大図書公司, 2005) 台北 (増田福太郎『台湾の宗教』の解説版)
- 国史館口述歴史叢書(25)[2003] 『台湾仏教一甲子——吳老擇先生訪談録——』 (口述歴史叢書(25) 仏教人物訪談 I 国史館 民国92 (2003) 年) 台北
- 邱敏捷 [2000] 『印順導師的仏教思想』 (法界出版, 2000) 台北
- 惟 覚 [2002] 『見性成仏——惟覚老和上開示録——』 中台拈華第一集 (中台山, 2002) 台中
- 聖 巖 [2000] 『印順思想——印順導師九秩晋五寿慶論文集——』 (正聞出版社, 2000) 新竹
- 伝 道 [2001] 『印順導師與人間仏教』 (妙心文集 1, 中華仏教百科文献基金会, 2001) 台南